



教授の呟き

第69回

自立たないための努力

東京海洋大学教授
苦瀬博仁

●●●「三方」にまつわる話

今から20年以上前のことである。「海陸一貫輸送という言葉があるが、陸上の物流の研究者がいないので来てくれないか」ということから、現在の大学（旧東京商船大学、現東京海洋大学）にお世話になることになった。

着任早々、「三方（さんかた）って、知ってますか？」とある教授に問われて困っていたら、「『土方（どかた：土木技術者）、船方（ふなかた：船舶運航者）、馬方（うまかた：運輸事業者）』を言うんですよ。あなたは、『土方』の学科を卒業して、『船方』の学校に来て、『馬方』の勉強をするんですよ」と、冗談めかしの将来の道筋を暗示してくれた。

このことを、土木をテーマにしている作家の田村喜子氏に話したら、「『方』がつくのは偉いのよ。だって、『親方』と『奥方』には頭が上がらないでしょ。三つも『方』があれば立派なものよ」と、勇気づけられた。

以後、馬方ならぬ物流や流通の勉強を続け、ロジスティクスを専門としている。

●●●「家」か、それとも「屋」か「方」か

「土方」は、「土木屋」とも呼ぶように「屋」がつく。しかし「作家」「作曲家」「彫刻家」など、「家」がつくのは文芸や芸術の世界に限られているようだ。このため「建築家」に

は、少しばかり羨望（せんぼう）の思いを抱く。しかし「屋」は、「音羽屋」など歌舞伎でも屋号になっているのだから、まんざら捨てたものでもない。

また、「親方」というように指導者に「方」が付くと考えれば、そして「奥様」よりも「奥方」の方がハイクラスだとすれば、「方」だって分が悪いわけではない。まして、大工の世界で「方」がつくのは棟梁（親方）だけだが、「土方」や「馬方」は、下っ端（？）でも「方」が付いている。

だから、たとえ「屋」や「方」と言われようとも、決して卑屈になることはない。「屋」や「方」が付くからこそ、親しみがわくこともある。

●●●「当たり前」の生活を支える

思い起こせば、大学の土木工学科に入ったころは、「神に代わって、地球を彫刻する」とのセリフに酔いしれたこともあった。しかし実態として、土木技術者は、道路、橋、上下水道など、およそ「人に踏まれるもの」を造ることになっている。

道路は渋滞すれば怒られ、すいていけば無駄だと非難される。水道が止まれば文句を言う人は多いが、絶え間なく上水を供給する努力に感謝する人は少ない。新潟中越地震に遭っても、新幹線は脱線だけで済み犠牲者はいなかった。震源地に近い原子力発電所は、建設会社に勤めていたころ工事現場に行ったこともあったため、無事の報にはホッとした。



このように、無事を確保するために「土方」は大変な努力を日夜続けている。しかし、無事であればあるほど、当たり前すぎて報道もされなければ、感謝もされない。

このことは、「船方」や「馬方」も同様である。

もしも中東からの石油輸送が滞ってしまったら、いまのガソリン代の値上げとは比較にならないほど生活に困窮するはずだ。日々の生活物資や食料品がわれわれの手に届かなかったら、生活を続けることもさることながら、生命の維持さえも危うくなる。

「あって当たり前」の生活を支えることが、「三方」の役割であり、宿命でもある。

●●● **目立たないための努力**

さらに、地震や災害にみまわれたときも救援で活躍する人のなかには必ず「三方」がいる。被災者の救出、輸送路の確保、緊急物資の輸送、飲料水の確保、けが人病人の搬送など、非常時にも「三方」は底力を発揮するが、それは望むところではない。むしろ「三方」は、密かに防災や救援のための準備をしながらも、できることなら被害もなく、自らの存在が目立たないことを願う。

「三方」は、「目立つときは叱られるとき」と諦観（ていかん）し、「目立たないこと」こそが「成功の証」と考えているようだ。そして、当たりのことが確実に行われていくよ



うにと、不断の努力を積み重ねている。

そこには「宿命」を果たすための、「密かな自負」と「確かな使命感」があると思うのである。

- (1) 曾野綾子：「無名碑」、講談社、1969年
- (2) 苦瀬：「防災のロジスティクスで憂いなし」、教授の呟き第9回、流通設計21、第34巻9号、pp72-73、2003年
- (3) 苦瀬：「業務継続のために、備蓄か緊急復旧か?」、教授の呟き第57回、流通設計21、第38巻9号、pp48-49、2007年

Profile

東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科 教授

苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により東京海洋大学、副学部長、評議員、流通情報工学科長を経て現職。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授（併任）。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)、「都市の物流マネジメント」(勁草書房) <http://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/>

